

D・カッツーそのメデイウム論の特異性

— J・J・ギブソンの道具論との比較研究 —

学校教育開発学コース 柴田 崇

David Katz—The Uniqueness of his Theory of Medium:
A Comparative Study with J. J. Gibson's Theory of tool

Takashi SHIBATA

This paper attempts to demonstrate the uniqueness of David Katz's theory in general and of his theory of "medium" in particular. When we explore the environment with our hand we can immediately feel objects in the environment. What is intriguing is that the same seems to hold true when we explore the environment with a rod in our hand. The tip of the tool, in other words, seems to be capable of direct perception and the tool as a whole seems to become "transparent" when it is in use. It will be argued that a phenomenon like this can be understood as the Cartesian "dogma" if we read Katz's "The World of Touch" in the light of James J. Gibson's theory of tools.

目 次

はじめに

1. ギブソンの道具論
2. カッツの触覚論—1
3. カッツの触覚論—2

おわりに

はじめに

ブリックスが温点、冷点を発見し、ゴールドシャイダーとドナルドソンがそれを確認して以来、触覚は、主として原子論的アプローチによって説明され、触覚論の関心は、皮膚感覚の「要素」探しに向けられてきた。このような、いわば感覚生理学的方法に対し、D・カッツ(1884~1953)は、意識の中に見られる現象を出発点とした感覚心理学的方法を実践した。よって、カッツの触覚論の特長が、その実験現象学という方法にあるのは確かである。他方、その研究成果から見た場合、カッツが、身体と対象との間に介在する物、つまりmediumへ、強い関心を向けていたことが理解できる。ここで言う介在物には、内科医の使う探り針 probe や外科手術の際のゴムサックや手袋、また、マッチ箱に

掛けられた布や触診における皮膚や脂肪、さらには、液体や気体といった流体、つまり、文字通りの媒質 medium も含まれている。ここには、同様の考察で介在物を扱う時に、探り針や白杖のみが取り上げられるのとは対照的なほどに、多様な介在物が含まれているのである。

本稿の目的は、カッツの『触覚の世界』(1925)¹⁾の解釈を通じて、その触覚論の特異性を特定することにある。その際、着目するのが、カッツの示した、mediumへの関心である。その意義を評価するにあたっては、生態心理学のJ・J・ギブソン(1904~1979)の考察が参考となる。ギブソンは、1966年の著書の中で、カッツの色覚論のみならず、触覚論を参照している²⁾。また、E・リードによれば、カッツは、ギブソンにG・ヨハンソンを引き合わせるなど、よき理解者として、ギブソンと直接の交流があった³⁾。よって、ギブソンを導きの糸としてカッツを考察することは、今後、ギブソンの生態心理学を理解する一助にもなると思われる。

1. ギブソンの道具論

ギブソンの生態心理学において medium の語は、文

字通り、媒質を指すものとしてのみ使用されている。カッツの触覚論を考察する際に主題となる介在物に相当する記述は、「触覚システムとその構成要素」⁴⁾『知覚システムとしての感覚』、また「意味に満ちた環境」⁵⁾『生態学的視覚論』(1979)に見られる。60年代までの知覚システムの研究からアフォーダンス理論の完成に向かうことで、介在物を分類する文脈に変化は見られるものの、二つの記述は、ハサミを例にあげて道具使用の意義を問題にしているという点では変わらない。ここでは、問題の所在がより明確になっている、後者の該当箇所を取り上げ、それを解釈する。「その使用において、道具は一種の手の extension であり、ほとんど手の付着物、または使用者自身の身体の一部といえる。それゆえ、道具はもはや環境の一部ではない。しかし、一旦使用を離れると、道具は環境中の単なる遊離物となる。このとき、確かに掴むことも運ぶこともできるとはいえ、それは観察者の外に存在するものでしかない。このような身体に何物かを付着させる能力は、生物と環境の境界 boundary が、皮膚の表面で固定されてはおらず、移動しようということを物語る。より一般的に言えば、この事態は、『主観』と『客観』の絶対的二元論が間違っていることを示唆するものである⁶⁾。道具とは、使用を離れていると、遊離物、あるいは環境の一部を構成するものにすぎないが、その使用においては、付着物、あるいは使用者の身体の一部になる。つまり、道具を使用するとき、通常、生物の皮膚の表面で固定しているとされる環境との境界は、使用者の身体の一部としての道具の先端まで移動することになる。この引用は、道具の使用時に見られる「現象」を記述したという点では、K・ヤスパーズ、M・メルロー＝ポンティらのものと異なるものではない⁷⁾。しかし、ギブソンは、こうした現象を記述する際に頻繁に使用される extension という概念を正確に使用することで、この概念の内包をも示唆している。その点で特筆すべきなのである。extension がデカルトの「延長 extensio」に由来することは、容易に推測できる。しかし、ギブソンは、この概念の起源のみならず、その価値についても明らかにする。主体と客体を絶対的に分離し、固定する哲学的二元論を問題に付したこの引用は、デカルト存在論の正確な読解を前提に、展開しているのである。

デカルトは、神なる無限の実体と、精神および物体からなる有限の実体とを区別した後に⁸⁾、思惟的存在たる精神と、延長的存在たる物体とを分離した⁹⁾。後者、つまり心一身の二元論とは、「思惟するもの」であ

る精神が存在するためにいかなる空間的场所をも必要としないのに対して、「延長するもの」である物体は端的に空間的な存在であるという、存在の資格の二元性を意味する¹⁰⁾。これら二つの存在の属性 attributum が、それぞれ「思惟 cogitatio」と「延長 extensio」である。この段階では、精神ならざる身体は、当然、「延長」の属性を有するものに分類される¹¹⁾。こうした心身二元論で問題になったのが、単なる精神でも、また単なる身体でもない、身心を兼ね備えた「人間 Homo」の存在であった¹²⁾。デカルトは、精神がその身体と結合する場所を「松果腺」に定め、物心分離的な理論哲学的立場と併設的に、第三の実在としての身心的「人間」を認めるといふ実践的立場を構えることで、この問題に対処した¹³⁾。このような構制の結果的、デカルトの存在論は、二つの異なる物体、すなわち「延長」の属性を有するいわゆる物体と、物体の属性を備えつつその他の物体とは異なる身体とを並存させることになった。つまり、デカルトの存在論は、心・身のみならず、身・物の二元論をも包含しているのである。延長 extensio の属性を備えたものが extensum であることから、便宜的に、いわゆる物体を extensum e(environment)、身体を extensum b(body)と置き換えてみると、ギブソンの記述の意義が、より鮮明になる。

主客分離の絶対的な二元論において、生物(人間)と環境の境界は、皮膚の表面で固定され、決して移動することはない。この場合、道具は、使用される時でさえ、環境の一部としての物体、つまり extensum e と見なされなければならない。しかし、ギブソンは、使用に供されているときには、道具は、単なる物体と考えられるべきでないと主張した。つまり、環境の側の延長したもの extensum e とのみ考えられてきた道具は、使用時には、身体(手)の延長 extension of the hand、すなわち身体側の延長したもの extensum b であり、身体と物体と間にあったはずの境界も、(身体+)道具と物体との間に移動していると考えなければならない。以上から、道具の使用時に見られる「現象」を記述したギブソンの引用は、デカルトに由来する身・物の二元論がゆらぐ事態として、その意義を有していることが理解できるのである¹⁴⁾。

道具、または人工物に関する記述における extension は、人間本来の機能を「拡張するもの」、あるいは、身体内部の器官を「外化したもの」と訳出すべき場合もある。前者は、身体機能を代行し、拡張 extend する、外的に独立した人工物、つまり機械装置の分析を通じて得られた概念で、K・マルクスに起源を有する。ま

た、後者は、道具を含むあらゆる人工物を、身体内部の器官が外化 outer したものとして捉え、人工物を通じて、それを外化した身体内部のメカニズムが明らかになるとする概念である。技術論の文脈では、E・カッツがその嚆矢とされているが、「外化」の思想自体は、体内の状態を分析するために内側にあったものを外側にもたらすという医学・生理学的技術に由来し、その起源は、体外に排出させた体液を手掛かりに体内の疾患を判断したヒポクラテスにまで遡る。extension がこのように多義的であることに鑑みれば、ギブソンのしたように「境界」という空間的な観点を一貫させなければ、デカルトに遡るもう一つの系譜に正確に定位することも、また、その身・物の二元論にゆらぎが見える事態として道具、あるいは介在物が使用される局面を記述することも不可能であったと考えられる。この意味で、ギブソンは特筆すべきなのである。

2. カッツの触覚論—1

ギブソンの記述は、道具の使用時に見られる「現象」が、デカルトを前提にしつつ、その二元論をゆるがすことを明らかにするものだった。extension の概念を一貫して空間的なものとして捉えたことで、この考察が可能になった。しかし、介在物の意義の考察という点から評価するならば、ギブソンの記述は、デカルトの二元論をゆるがすことに終始した、と言わざるを得ない¹⁵⁾。

境界の移動が主題になるということは、介在物が身体と環境のどちらの属性を持つかに焦点が置かれていることを意味する。ここでの問題は、介在物の個々の属性ではなく、その分類にある。つまり、二つの物体を指標にして、介在物を分類することで、境界を確定する作業である。この構制では、触覚の所在はともかく、介在物に固有の触覚的性質が主題化されることはない。なぜなら、ここでは、依然、デカルトの二元論が前提とされており、第三の实在として介在物が存在する余地が残されていないからである。このことは、「現象」が記述される時、一般に、「介在物が透明になる」と表現されることにも現われている。その使用時に、介在物は、あたかも身体の一部として認識される。それは、介在物が、環境の属性を放棄すると同時に身体属性を獲得することを意味する。ここに支配しているのは、身体か環境かの排中律に他ならない。つまり、ここには、medium の資格で实在する介在物は登場しえないのである。

以上から、「現象」をもとに考察を進めることが、实在する medium として介在物を分析する可能性を排除してしまうものであると結論できる。これは、カッツが触覚論で上げた成果とは対照的である。つまり、カッツの特異性とは、实在する medium として介在物の触覚的性質を分析したところにある。そして、それを可能にしたのが、視覚、とりわけ色覚とのアナロジーで触覚を考察するという発想であった。その発想の特異性を検証するために、まず、視覚と触覚の関係する一般的な思想を文脈に、「現象」の意義をもう一度考えてみる。

一般に、感覚は二つに分けられる。一つは近感覚と呼ばれ、知覚されたものが身体の感受部位に直接に接触している場合である。もう一つが遠感覚と呼ばれ、知覚されたものが、媒質 medium を介して感覚器官を刺激する場合である¹⁶⁾。これを基準にすると、視覚は遠感覚に、触覚は近感覚に分類される。しかし、この分類にも例外がある。それが、例えば探り針 probe に見られる、触「現象」である。このように例外的に遠感覚として知覚される触覚的現象を、カッツは、『触覚の世界』で、遠隔触に分類しているが、その多様性を記述したロツツェの現象学的感性を讀んで、別の箇所では、「探り針の原則」と言い換えている¹⁷⁾。

「探り針の原則」の名は、ロツツェの『小宇宙』からの次の引用に由来する。『わたしたちは、自分の手に対象が触れるのを感じるのと同じように、直接、感官を通して、離れたところにある対象に棒が触れるのを感じると思う。……視覚障害者が用いる白杖や、内科医の使う探り針がまさにそうである。……裁縫をするときにも、針の先に直接知覚する力があるように思われる¹⁸⁾』。本稿でも、カッツに倣って、以下、「現象」を「探り針の原則」と言い換える。さて、ロツツェは、「探り針の原則」によって、介在物と対象の境界に注目し、そこで生じる触現象を主題にした。これに対し、カッツは、『触覚の世界』において、この「探り針の原則」には回収されない触現象を記述することになる。それは、その使用時に、介在物、あるいは道具を「透明なもの」として扱わず、介在物に固有の触現象が存在することに関する記述であった。前記のように、カッツは、触現象を記述する際に、視覚現象とのアナロジーを出発点とした。それは、遠感覚と近感覚等の既存の分類体系を前提とすることなく、色現象の記述法を触現象にあてはめるという、一風変わった作業であった。しかし、そのことが、「探り針の原則」とは別の現象を記述することにつながるのである。

カツツは、その色覚論で色知覚を、まず、色価と色の現われ方、つまり色現象に区別する¹⁹⁾。色価とは、色の現われ方が変わっても不変であるもの、例えば、黒、白、赤、緑などの色を指す。わたしたちは、色がどんな現われ方をしているか、目で見れば、有彩色や無彩色といった色を感じることができる。さらに、色の現われ方は、一次色と二次色に区別される。前者は、空間における色の一次的な現われ方を指し、表面色、フィルム色、空間色などが含まれる。表面色とは、対象の表面に現われた色、フィルム色とは、空の色に見られるように、後方に対象の表面を持たない媒質それ自体の色、そして、空間色とは、フィルム色と対照的に、媒質を通して対象を見たときに見える色の現われ方で、対象の表面の色として現われた空間の色である。このように、一次色は、対象と媒質の組み合わせによって分類されている。これら一次的な色の現われ方に対して、後者は、様々な照明によって作り出される、色の二次的な現われ方を指す。また、カツツは、色の現われ方よりも、物の物理的特性についてより重要な情報となるものとして表面の肌理をあげ、それを視覚的マイクロ構造と呼んでいる。さて、以上の色覚論を触覚現象にあてはめると、次のようになる。

まず、色価に相当するものは触覚知覚には存在しない²⁰⁾。仮にティチナーのように、刺激に強度の次元があることを根拠に、触(圧)覚に注目したとしても、色価の豊かさに比べれば、極めて単調なものでしかない²¹⁾。しかし、触価とは対照的に、触の現われ方については、表面色、フィルム色、空間色にそれぞれ相当する触現象の存在を認めることができる。木、金属、ガラスなどの材質からつくられたものに触れるとき、対象の表面に、連続して知覚できる領域を体験する。表面色と同じように空間の中で特定の場所にあるものとして経験されるこの触現象が、表面触である²²⁾。次に、手に対して強い風を吹きつけたり、さまざまな密度の溶液の中に手を浸して、十分な速度で動かしたとき、明確な形やパターンを持たない触現象を体験する。それは、確かに厚みはあるものの、確信をもって空間的であるとは見なすことができない。この点で、空間の中で定まった方向性を持つ表面触とも、次に述べる、後方に境界を持つ空間触とも異なる。その体験には、対象を認知させる特徴、つまり表面が、いかなるかたちでも存在していない。言い換えれば、媒質そのものの触現象が、空間充満触である²³⁾。このように対象を欠いた空間充満触は、媒質の抵抗感によってその存在が保障される。よって、手にあたる流体の力にとまな

て変化し、流体の力がゼロになると、感覚そのものが失われてしまう。そして最後に、空間色に相当するのが空間触である²⁴⁾。例えば、マッチ箱のような小さなものを固い土台の上に置き、それを厚めの綿か布で覆う。覆われた対象の形を知ろうとして触ってみると、それがどんなものかが分かり、それと同時に、それを覆っている綿、あるいは布の層を、空間のような厚みのある触として受けとることができる。そして、このように覆いの下にある対象を識別しようとするときには、覆いの表面が、あたかも透明になったかのように気付かれなくなる。つまり、覆いの表面触が消え、その下にある対象の表面触と、媒介物の空間的な印象が同時に与えられるのが、空間触である。色が空間色となるのは、色を通して対象を見たときに限られる。空間色は、ミルクを溶かした液体が入った水槽を、対象の前に置くと見えるが、フィルム色である空の前に置いても見えない。それは、空が、その後方にいかなる境界も持たないからである。これと同様に、綿の層を台の上に置いただけで触ってみても、それを通して立体的な対象が感じられなければ、綿の層は、空間触の経験をつくりださない。そして、空間色が、中ぐらいの不透明さや曇りぐあいのときにもっとも知覚されやすいように、空間触もまた、綿の層が中ぐらいの厚みのときにもっとも知覚されやすい。

空間触は、医療の現場で大切な役割を果たしている。医師は、触診によって、皮膚や脂肪の層を通して内臓に触れ、病変を見つけ出す。しかし、彼らが注目しているのは、内臓そのものであり、内臓と触診する手の間にある層が主題に上ることはない。つまり、この場合も、媒介物に注意が向けられることは稀である。こうした事実が、空間触の記述を妨げてきた一因であろう。その意味で、空間触は、現象を出発点とした感覚心理学的方法を実践してきたカツツの成果である。そして、カツツは、その触覚論で、もう一つの触現象を上げている。それが、貫通触面である。この触現象の記述によって、「探り針の原則」とは別の現象として道具使用の場面を記述することが可能になるのである。

3. カツツの触覚論—2

厚すぎない一枚の紙を、固定された台の上に置く。その紙の上に指先を軽く触れる程度に置き、指と紙が離れないようにして、その指をすばやく動かすと、台の表面の肌理が知覚される。その肌理の明瞭性は、紙の厚さによって変わる。紙や布のような介在物が遮蔽

効果を持っていることを考慮すれば、この明瞭性には驚くべきものがある。さらに、台面の肌理を感じているときに、指先には、台面との間にある介在物の薄膜の印象がほんの一瞬も消えてなくなることは、注目に値する。紙と指とが同じ周期で動いている限り、こうした介在物の触覚的な経験は、台面の表面触の経験とともに明瞭に持続し、この二つが融合する兆しすらない。そこには、台面の肌理のみならず、台面側の介在物の肌理、そして遮蔽層そのものの知覚が存在する。これが、貫通触面である²⁵⁾。貫通触面は、手袋をはめて何かに触るときに生じる極めて平凡なできごとである。医療の現場でも、ゴムの手袋をはめて触診を行うようなときには、こうした触現象に出会うことになる。では次に、この貫通触面の意義を、extensionの議論とカッツの触覚論という二つの文脈を設定し、空間触との比較において検証してみよう。

前記の通り、extensionの議論にも、身体、媒体、対象の三つが登場する。その主題は、媒体を物体としての属性に応じて身体と対象のどちらかに分類し、境界を確定することにあった。そして、その境界が、媒介物を道具として使用しているときには媒体と対象の間に移行すること、つまり、それまで対象の側に分類されていた媒体が、身体の属性を有し、身体の側に分類されるべきことを述べるものだった。空間触と貫通触面も、それぞれの触現象が現われているときには、媒体と対象の間の境界が問題になっている。しかし、二つの触現象は、媒介物に特有の触覚的性質を記述している点で、二元論的属性を前提して、それに基づいて媒介物を分類するextensionの議論には回収されえないことでも共通している。では、両者の相違点は、どこにあるのだろうか。extensionの議論を文脈に考察する限り、媒介物の触覚的性質については問題に上らない。よって、両者の差異は、媒介物を通して対象に触れるという課題を遂行する前段階で、媒体が、身体に付着しているか対象に付着しているかの違いでしかない。あえて分類するならば、空間触が現われる前の媒体は *extensum e*、貫通触面が現われる前の媒体は *extensum b* と言いうるにすぎない。ここから、「探り針の原則」との比較で注目すべきなのが貫通触面であることは推測しうるが、もちろん、このことが、課題遂行時に、両触現象に質的な相違点が存在することを保証するものでないのも明らかであろう。その相違点は、extensionの議論を文脈にする限り、記述することはできないのである。ともあれ、以上から、媒体は、それが課題を遂行する前、*extensum e* に分類さ

れようと *extensum b* に分類されようとも、使用時には、双方が、媒体として特有の性質を記述されるべきものであることが理解できる。次に、それを可能にしたカッツの触覚論を文脈に、今一度、二つの触現象を比較してみる。

カッツの触覚論は、色覚論、とりわけ色現象から概念を導入した点に、その特徴があった。まず、表面色から表面触が、フィルム色から空間充満触が分節された。そして、空間触は、空間色がそうであるように、これら二つの基本的な現われ方の組み合わせとして成立している。すなわち、空間充満触と表面触によって、媒体の触現象と対象表面の触現象の二つから成り立つ空間触が形成されている。ここで注目すべきは、空間触という触現象が身体と接する媒体の表面触が消失することを要件にしている点である²⁶⁾。換言すれば、媒体の表面触が身体との境界から対象との境界に移行して初めて、空間触を記述することが可能になる。このような構制で、空間触は、対象の表面触のみならず媒体それ自体の触現象を問題にしているのである。そして、空間触と同じく媒体と対象表面の触現象から成る貫通触面も、身体と接する媒体の表面触が消失することを要件にしている。しかし、貫通触面は、対象の表面触に加え、対象と接する媒体の表面触の持続を記述する点で、媒体の表面触には一切言及のない空間触と異なっている。これが、両者の相違点である。媒体に表面触が存在すること、それが触現象の間で持続すること、その発見的意義について理解するためには、貫通触面についてさらに詳しく検証する必要がある。

カッツは、貫通触面の説明を始めるに際し、類似する色現象として透明色を上げている。しかし、貫通触面に対応する色現象が、正確には透明色の一種の透明フィルム色であることは、『触覚の世界』では、はっきりとは述べられていない。また、透明フィルム色の説明も省略されている。よって、前著『色の世界』²⁷⁾を参照しつつ、透明フィルム色と貫通触面の関連性について考察する。半透明のくもりガラス、あるいは彩色されたゼラチンの板を、その境界が見えるようにして、前方に、腕を伸ばした距離に掲げる。を通して、向う側にある対象(例えば、開いた本)を両目で見ると、そのようなガラスやゼラチンを通して対象が見えるのだ、と感じる。この印象は、著しく批判的な態度をとる場合は別だが、目の焦点を自然に自由に動かすことで、より明瞭になる。そのとき、ガラスのくもりやゼラチンの色は、ほとんどの場合に、ガラスやゼラチン自体の平面とほぼ一致する平面に局在している。こ

のようにして透明な物体の中に見られる色の現われ方が、透明フィルム色である。その名が示すとおり、透明フィルム色は、背景を覆い隠すことがない。それを通して対象を見ることができて、その性質が関与する範囲で、対象の表面色に影響を与える²⁸⁾。その特徴は、対象との間に介在するのが物体である場合にも、くもりガラスや色付きゼラチン程度の透明さがあれば、対象を遮蔽しないこと、介在物の色は、それが関与する対象の部分と関与しない対象の部分との関係から、介在物の中にあるように見えること、そして、関与する部分では、当然、対象の表面色に影響を及ぼすこと、にある。介在物を通して対象が見えることを要件とする点では、空間色と変わらない。両者の差異は、空間色が三次元空間に構造化され、厚みのある色として現われるのに対し、透明フィルム色は、明確な構造、あるいは厚みを持たないところにある。とはいえ、その差異は、通常、ガラスのくもりやゼラチンの色に肌理が存在しないという事実によるものであって、実際には、その境界は相対的で流動的である。つまり、媒介物の構造的な明確さの程度を基準に両者が分類されていると理解すべきなのである。

こうした透明フィルム色をもとに、カツは、『触覚論』で次のように述べている。「貫通触面を明瞭に知覚するには、運動が重要である。このことについて一言。「現われ方Ⅰ」(『色の世界』)の中で、透明色のことを書いたが、透明色は、介在物(くもりガラス、ゼラチンなど)を動かしたり、頭を介在物に対して動かしたりしたときに、その明瞭度がいちじるしく高まることを付け加えたい²⁹⁾」。ここでは、運動によって、貫通触面のみならず、透明(フィルム)色の現われ方もより明瞭になることが述べられている。『色の世界』に、目の焦点を自然に自由に動かすことによって透明フィルム色がより明瞭になるという記述あったことを想起すれば、この引用が知覚における運動の意義を強調したものであること、その発見が貫通触面の考察によって得られたものであることが、推測できる。『触覚の世界』で、表面触、空間充満触、空間触とは対照的に、貫通触面だけが、それに相当する色現象から説明されていないという事実も、この触現象が色現象との類比には還元できない意義を持っていることを証している。貫通触面では、その他の触現象とは逆に、色現象の方がそれに相当する触現象との類比によって説明され、修正を施されているのである。では、貫通触面を通して発見された運動は、知覚論においてどのような意義を持っているのだろうか。

前記のように、貫通触面では、遮蔽層、遮蔽層の肌理、台面の肌理の三つが知覚される。つまり、層としての媒体と、対象に接する媒体の表面触、対象の表面触である。空間触との比較から明らかになったのは、貫通触面の特徴が、後者二つの表面触を扱う点だった。貫通触面における運動の発見の意義とは、まず、表面触が、二つの表面触の運動から生じるということである。つまり、表面触のあるところには必ず二つの表面を相関させる運動がある。その意味で、表面触には、対象の表面の性質のみならず、媒体の表面の性質が埋め込まれていると言うことができる。したがって、知覚論の観点からは、境界 boundary は、二つの物体が存在することに基づく切れ目という以上に、運動によって両者が相関し、知覚が生じる接触面として意味がある。貫通触面(空間触も)、その成立に、身体と接する媒体の表面触が消失し、媒体の表面触が、身体との境界から対象との境界に移行し、一元化されることが要件となっていた。貫通触面の場合、手と媒体の間の運動をなくし、そこを境界として生じる表面触を消失させなければ、媒体の性質はおろか、二つの表面触が混在する、構造を持たない触印象しか獲得することはできない。貫通触面、そして空間触で、手と媒体の間の表面が「透明になったかのような³⁰⁾」印象をとまうのには、このように、知覚的な根拠がある。こうして、運動の意義とともに、貫通触面に二つの表面触があることの理由が理解できる。では、媒体の触現象についてはどうだろうか。

既に述べた通り、空間色と透明フィルム色の差異は、相対的で流動的だった。このことは、空間触と貫通触面の場合にもあてはまる。つまり、二つの触現象における媒介物の性質も、その構造の明確さによって、差異化されるのである。空間触をつくりだす綿の層は、単独の表面触とは異なる構造として知覚される。そして、層の構造もまた、運動によって知覚されている。空間色が、中ぐらいの不透明さや曇りぐあいのおきに最も知覚されやすいように、空間触もまた、綿の層が中ぐらいの厚みのときにもっとも知覚されやすい。それは、一方で、綿の層が厚くなると、媒介する層の構造が明確になるとともに、空間触の成立要件である対象の表面触が徐々にあいまいになって行くことを意味する。その限界は、表面触が、ほとんど圧として知覚されている状況であろう。その場合でも、空間触を問題にする限り、表面の触覚構造が失われることはない。他方、綿の層が薄くなると、媒介する層の構造が徐々にあいまいになり、その代わりに、表面触の構造がよ

り明確に知覚されるようになる。その場合でも、媒体の層が手袋の薄さ、紙の薄さになるときでさえ、媒体の触覚構造が失われることはない。この限界において、空間触と貫通触面は、結果的に一致する。それは、課題遂行時に両者に質的差異が認められなかったことを想起すれば理解できる事実である。ここから、次のように結論できる。空間触と貫通触面は、媒体の構造の明確さにもとづく便宜的なカテゴリーである。そして、貫通触面とは、手と対象の間に物体があって、そこに運動がある限り、どんなにあいまいになろうとも、その物体、つまり媒体に固有の触覚構造が存在することを保証するものなのである。確かに、貫通触面には、それを構成する表面触に、媒体の性質が埋め込まれている。しかし、それに還元されない触現象が、層としての媒体にも認められることを前提にしている。よって、どちらか一つの触現象に還元するのではなく、異なる位相の二つの触現象が重なったものとして理解すべきなのである。

以上の議論は、媒体が、いわゆる剛体の場合にも妥当する。カッツは、「探り針の原則」を活写したロツツェの現象学的感性の高さを評価しつつも、硬度の異なる鉛筆を使った実験を遂行することで、硬い介在物にも固有の触覚構造が認められることを指摘し、ロツツェの考えに留保する姿勢を示している。「素朴に観察するかぎり、鉛筆の硬度は、鉛筆の先に感じられるのであって、鉛筆を動かしている手の部分ではないことが分かる。刺激面自体もペン先で感じられる。この問題を、素朴ではなく、分析的に観察するならば、鉛筆を握っている手の中に持続する圧と振動を感じる。この圧と振動は、鉛筆の硬度によって変化し、柔らかい鉛筆よりも硬いものの方が強く感じられる³¹⁾」。このとき、手の中に感じられている圧と振動は、手と媒体の表面触でないのはもちろん、媒体と対象の表面触にも還元できない。この実験では、媒体の材質に固有の性質が、紙と鉛筆の表面、あるいは鉛筆の先ではなく、鉛筆を握る手の中に感じられている。そこには、媒体と対象の表面触と、剛体という固有の性質を反映した媒体の触現象が重なったものが現象しているのである。空間触と貫通触面では、媒体と手の間の表面触がなくなる、つまり、表面が「透明に」なる。そのことには知覚的な根拠があった。しかし、いかなる場合も、媒体が「透明に」なることはない。それは、知覚的な根拠がないからに他ならない。

おわりに

媒体は、運動がある限り、それに固有の構造を知覚させる。そして、物体の属性とは、そのように知覚される構造に基づいて分類されなければならない。この思考は、二つの属性を前提にした、デカルトに由来する思考とはまったく異なる。カッツは、*extensum e* や *extensum b* でも、剛体や流体でもなく、媒体という多様な存在を前提に議論を開始したのである。いかなる場合にも、媒体は主体や対象と同じ資格で実在している。このように、三者の実在を認め、運動を通じた三者の関わりを文脈にして初めて、個々の媒体の意味を考察することが可能になった。その具体的な成果が、空間触と貫通触面である。

ともあれ、媒体は、決して「透明に」なることがない。あたかも素朴なものと感じられてきた「探り針の原則」は、今や一種のドグマとして、思考の場に上っている。カッツの触覚論、より正確にはメデイウム論、その特異性としてこの成果を数え上げることは、もはや異論のないところであろう。

(指導教官 佐々木正人教授)

注

- 1) デーヴィット・カッツ『触覚の世界』東山篤規、岩切絹代訳、新曜社、2003年。
- 2) Gibson, James J., *The Senses Considered as Perceptual System*, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1983, p. 116.
- 3) Reed, Edward S., *James J. Gibson and the Psychology of Perception*, Yale University Press, New Haven and London, 1988, p. 210.
- 4) Gibson, James J., *op. cit.*, pp. 97-115.
- 5) Gibson, James J., *The ecological Approach to Visual Perception*, Lawrence Erlbaum Associates, Inc., Hillsdale, New Jersey, 1986, pp. 33-44.
- 6) *Ibid.*, p. 41.
- 7) カール・ヤスパーズ『精神病理学総論 上』岩波書店、1953年、135～136頁 (Karl Jaspers, *Allgemeine Psychopathologie*, 1948 (1913)), モーリス・メルロー＝ポンティ『知覚の現象学 I』竹内芳郎、小木貞孝訳、みすず書房、1991年、240～1頁 (Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, Paris, 1945)等。
- 8) デカルト『哲学原理』『デカルト著作集 3』白水社、60頁
- 9) 前掲書、60～61頁。
- 10) 所雄章『デカルト II』勁草書房、1996年、282～283頁。
- 11) デカルト『哲学原理』、82頁。
- 12) 所雄章『デカルト II』、348頁以下。

- 13) 前掲書, 360頁。
- 14) デカルトの「屈折光学」には、「盲人の杖」が「光」を理解する例えとして使用されている。「ちょうどこの盲人が出会う物体の運動または抵抗が、その杖を伸立ちとして手の方に伝わるのと同じように、光るものと呼ばれる物体にあつては、光というものは空気あるいは他の透明な物体を伸立ちとしてわれわれの方に伝わってくる、きわめて速く、きわめて活潑なある運動または作用に他ならないと考えていただきたい(デカルト「屈折光学」『デカルト著作集1』白水社, 1973年, 115頁)」。この場合も、媒体としての「杖」、そして媒質としての「空気あるいは他の透明な物体」が、「盲人が出会う物体」、そして「太陽」のような光源、つまり対象とは別種の物体として捉えられている点は注目すべきであろう。
- 15) もちろん、ギブソンのメディウム論は道具論に還元されるものではない。環境に実在する特性とそれを探索する生物を基礎にするアフォーダンス理論では、媒質は、運動を可能にし、運動によって生じる環境の情報を伝達するものとして、そもそも実体のある物質とは別のカテゴリーを形成する (e. g. 1979, pp. 16-32.)。媒質と物質、そして両者を分かち面による環境の記述を主題とするギブソンの生態心理学とカツツの感覚心理学の比較研究は、介在物の意義についての議論にとどまらず、存在論的な視点からもなされる必要がある。
- 16) カツツ, 前掲書, 13頁。
- 17) 前掲書, 82頁。
- 18) 前掲書, 81頁。
- 19) 前掲書, 12頁。
- 20) 前掲書, 12頁。
- 21) 前掲書, 18頁。
- 22) 前掲書, 20頁。
- 23) 前掲書, 21頁。
- 24) 前掲書, 22~23頁。
- 25) 前掲書, 23~24頁。
- 26) 前掲書, 22頁。
- 27) Katz, David, *The World of Colour*, Kegan Paul, Trench, Trubner and Co., 1935.
- 28) *Ibid.*, pp. 17-18.
- 29) カツツ, 前掲書, 24頁。
- 30) 前掲書, 22頁。
- 31) 前掲書, 75頁。